

正法眼蔵随聞記 5-13

一日示して云く、世間の人多く云ふ、某し(それがし)師の言葉を聞けども我が心に叶わずと。此の言は非なり。知らず其のこゝろいかん。若しは聖教等の道理の我が心に違背して非なりと思か。これは一向の凡愚なり。亦は師の云へる言が我が心に契はざるか。若し然あらばなんぞはじめより師に問ふや。亦日来の情見を以て云か。もししかあらば是れは無始よりこのかたの妄念なり。学道の用心と云ふは、我が心にたがへども師の言ば聖教の言理ならば全く其に随て、本の我見をすてゝ、あらためゆくべし。此の心が学道第一の故実なり。

われ昔日(そのかみ)、我が朋輩の中に我見を執して知識をとぶらひける者ありき。我が心に違するをば心得ずと云て、我見にあひかなふをば執して、一生空くすぎて仏法を会せざりけり。

我れそれを見て智発してしりぬ、学道は然あるべからずと。かく思ひて師の言ばに随て、全く道理を得て、其後看經の次でに、或る經に云く、仏法を学せんと思はゝ三世の心を相続することなかれと。誠に知ぬ、さきの諸念旧見を記持せずして次第にあらためゆくべきなりということ。書に云く、忠言逆耳。いふこゝろは、我為に忠有べきことばは必ず耳に違するなり。違するとも強ひて随ひ行ぜば畢竟じて益有べきなり。